インフィニットストラトスに超大国が転移して来た（仮）

Zzzzzzzzzzzzzzzzz

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界に蔓延する女尊男碑主義、この根拠はＩＳ最強論である。

これを覆す超大国が地球に転移してきたら世界にどんな影響が起きるのか。

・感想に対する返答は基本致しません。採用するかもしれないアドバイスに対しては詳細をお聞きする為に返答する場合がございます。ご了承下さい。

・完全不定期投稿、続きが書け次第投稿する予定です。

作者の実力不足により凍結いたします。ご覧になって下さった皆様、お気に入り登録して下さった皆様。読んで下さりありがとうございました。

目次

第一話 …… 1
第二話 …… 4
第三話 …… 7
第四話 …… 9
第五話 …… 13

第一話

薄暗い倉庫の中にロープで縛られた少年と数人の男がいた。少年は織斑一夏と言い、姉の織斑千冬にモンドグロッソの決勝戦を棄権させる為に誘拐されたのだ。

「しかし大丈夫か？　本当に決勝を棄権するのか？」

「大丈夫だ、ブリュンヒルデは弟思いだって話だからな」

「それ、違うよ」

「ボウズ、それはどういうこった」

「あいつが大事なのは秋十だけ、俺はどうでもいいんだ」

少年には双子の兄がいて常に天才の兄と比べられていた、周囲には迫害され姉にも褒められることなく兄に至っては迫害に加担していたのだ。

「はあ？　そんなわ……『続いて日本国家代表にして前大会の覇者！　織斑千冬！』

「でしょ？」

「……そうみたいだな。これで俺達はお前を殺さなければならなくなった訳だが、言い残す事はあるか？」

「そうだね、こんなクソッタレな世界から救ってくれてありがとう。……かな」

「……そうかい、あの世では楽しくやれよ」

そう言うと男は拳銃で少年を撃ち、その場を離れて行った。少年は穏やかな顔をしていたが少しすると不思議な事に少年の体が薄く光り、消滅した。

「一夏！」

そのすぐ後に彼の姉の織斑千冬が駆けつけた、そこには夥しく流れた血があっただけであり、ＤＮＡ鑑定で一夏本人の血液である事が確認され、その場にあった血の量から死亡した物と判断された。行われた葬式に来た者は殆どが隠れて薄ら笑いをしていたが彼女はそれを知らない。

「ここは、どこだ？」
銃で撃たれて死んだはずの一夏は牢屋の中で目を覚まし、あたりを見渡していると鉄格子の向こう側から声がかかる、そちらを向くと軍服と思われる物を着た男がこちらを向いていた。
「目が覚めたみたいだな、気分はどうだ？」
「ある意味最高の気分ですよ」
「で、何の目的であの場所にいた？　大人しく答えれば尋問で済ませてやる」
「さあね、自分としては倉庫か何処かに監禁されてた筈で、こんな鉄格子がある様な場所に心当たりは無いけど」
「そうか、貴様の尋問はこれからも続ける。何か欲しい物はあるか？」
「そうだね、紙とペンが欲しい」
「分った、後で届けさせる」
そう言うと声をかけた男は去って行った。彼は王宮の中庭で倒れている所を発見、捕縛されたのだ。一夏が要求した紙とペンは翌日に届き、暇つぶしとして様々な理論が書かれて行く。実は一夏は使う機会が無かっただけで束に匹敵する頭脳を持っていたのだ。
三ヶ月後、一夏が尋問の合間に書いた理論は全て回収されて国立研究所で研究の対象となっていた。ただし内容は日本語、つまり未知の言語で書かれていたが三割は解読されている、これは研究員の優秀さと多数の人員を投入した結果であり、そしてその内容はこの国のトップである皇帝マクシミリアンに報告されていた。
「なるほど、それほどまでに優秀なのか」
「ええ、それでいかがなさいますか？」
「あの者か？　国立研究所に所属させろ、この才能を捨てる真似は出来ない」

更に半年後、一夏は軍の監視の下で国立研究所に連行されていた。

「何で俺が国立研究所の職員になるんですか？　自分で言うのもあれですがかなり胡散臭いと思いますよ」
「それはそうだが皇帝陛下の悪癖もほどほどにして欲しいよ」
「悪癖？」
「ああ、陛下は才能さえ示せばどんな不審人物でも優遇する悪癖があるのさ。もうすぐ着くから降りる準備をしておけ」
　そして国立研究所に到着して一行は所長室に向かった。
「ようこそ一夏君、私が所長のアレン＝ウォーカーだ。君の書いた論文は実に素晴らしかった、これからもその才能を存分に発揮してくれ給え。それでは早速君の研究室に向かおうか」

第二話

帝国歴７５９年９月２１日午前零時、突如として他国及び人工衛星との通信が不可能となる事態が発生し帝国は混乱に陥った。更には天体の位置がこれまでと大幅に異なっていたのだ、これらの事態に対して帝国政府は軍に多方面への航空偵察を命令する。

「見渡す限り何もありませんね」

「しかしいきなり衛星や他国との通信が不可能になったと思ったら星の位置が変わってるとは、どんな天変地異が起きたんだ」

「異世界に転移とかですかね？」

「小説の見すぎ、と言えない事が残念だ」

『機長、レーダーに反応です。およそ１００㎞前方に艦隊があります、大きさはおよそ３００ｍ程が１隻、１５０ｍ程が３隻。どうしますか？』

「確認するぞ、副長が言ったように仮に異世界だとしてどのくらいの技術レベルかを推測する材料にな。その前に本国へ連絡しとけ、撃墜されてからじゃ情報は送れないからな」

『分かりました』

「撃墜されないといいですね」

「もしその艦隊が戦争中なら、そろそろミサイルか戦闘機が飛んでくるぞ。気を引き締めろ」

『……聞……こち…アメリ……の』

「機長！　無線が！」

「分ってる！『こちらアストリア帝国海軍、こちらアストリア帝国海軍。聞こえるか』」

『……こちらアメリカ合衆国海軍、アストリア帝国とはこの先にある大陸の国家の名前か？』

「『そうだ』」

『我々はこのままの進路で貴国へ向かう。艦隊の派遣を求む』

王宮では先ほど発進した偵察隊からの報告を元に会議が行われていた。主にどの様な対応を行うかであり、それは情報交換後に国交樹

立と言う事で一致していたがその過程を議論していた。
「派遣艦隊の規模を大きくして国力を示すべきだ！」
「しかしそれで反感を持たれては事だぞ！　侵略を目的だと思われては交渉が拗れる！」
「帝国が舐められる事は国益を損なうのだぞ！」
「鎮まれ！　陛下はどの様にお考えで？」
「……派遣艦隊の規模は第二航空艦隊と第三通常艦隊を合体させ第一臨時艦隊として派遣する、ただしそれはアメリカ合衆国の艦隊と接触するまでだ、それ以降は第二航空艦隊は帰還させ第三通常艦隊を派遣艦隊とする。軍務卿、何か問題はあるか？」
「いえ、アメリカ合衆国に艦隊の規模を見せる事で国力を示せますし艦隊の半分を帰還させる事で侵略の意思は無いと示す事が出来ます。それが現在の最善でしょう」
「ではその様に進めろ」
　また同じ様にホワイトハウスでの執務室でも会議が行われている。最もこちらが議論しているのは向こうの国力や国民性などである。
「突如として現れた例の大陸ですが、アストリア帝国と言う国家が統治している様です。無論その他の国家が存在する可能性もありますが現在確認出来ているのはその一ヶ国だけです」
「その国の技術レベルや政治体系はどうなっている？　これからの対応を決める最重要要素だ」
「政治体系はまだ不明ですが技術レベルは我々と同程度と思われます。第七艦隊が彼らの物と思われる航空機と接触しましたがＰ―８に良く似ていました。仮に戦争になれば兵器の性能は同等でしょうし、勝利しても多大な損害が発生する事は確実です」
「向こうが侵略的国家で無い事を祈りつつアストリアへの対応を考えよう」
「国務省としては一先ず政治体系の確認と国交樹立、その後は彼らの一般的文化や風習、宗教などの調査をすべきかと。もし彼らの怒りに触れて戦争になったら一大事です」
「その方向で進めて行く事にしよう。ただ万が一戦争になった場合に

備えて国防総省は計画を立案してくれ」

イギリス等のＩＳ保有国では出現した大陸への艦隊派遣に手間取っていた、その理由はＩＳ開発に予算を取られて通常兵器を削減させられていた為、軍艦の運用スケジュールがギリギリでその調整に難航していたからである。

大陸転移事件と名付けられたアストリア帝国の出現から半月後、アストリアとアメリカの国交が結ばれる中、ＩＳ保有国との国交樹立交渉は難航していた。原因は外交官のＩＳ最強論を前面に押し出した脅迫外交であり、大きな反発を呼んだ物の一応国交は結ばれた。

第三話

　ホワイトハウスの会議室で大統領と政府高官の会議が行われていた。議題はアストリアとの関係についてである。
「まず軍備に関してですが、どの程度の兵器を保有するのかすらわかっていない今は諜報する以前の問題で民間に公開されている情報の収集を進めています」
「現状ではどの程度の事が分かっている？　不確定情報も含めて報告してくれ」
「まず兵器の種類はこの世界とあまり変わりません。個々の兵器についてですが、ステルスの概念は確認していますが戦闘機から推測するに形状によらないステルス技術が存在する様です」
「すまないがそう言った事には詳しくなくてな、良くわからん」
「我々のステルス技術は発信された電波を受信機以外の方向に反射する事で探知を防いでいますが、彼らは照射された電波を完全に吸収するか消滅させる事で探知を防いでいる様です」
「電波を消滅させるなど出来るのか？」
「出来ます。電波は『波』の性質を持ちますが、波は上下が逆さまで同じ大きさの波をぶつけると弱め合うと言う現象が起きます。これにより探知を防ぐ事は理論上は可能です。更に彼らの戦闘機は通常の形態の他に人型やガウォークと呼ばれる中間形態に変形する事で驚異的な機動力を発揮する事が可能です。そして核融合を利用した原子力エンジンを搭載して航続力は無限です」
「笑うしかないとはこの事だな」
「海軍は航空母艦を主力としている様で我が国のジェラルド級と同等の物が８隻、フランスのドゴール級と同等の物が１０隻、日本のひゅうが型より小さい物が１２隻です」
「最後の物はそれほど有用には思えないぞ」
「おそらくＷＷ２での護衛空母の様な役割を持たせているのかと。数機の爆撃機ならこれで追い返せます、燃料切れの心配がないから行え

る方法です」
「海軍のその他艦艇、陸軍は我々の物とさほど変わりありませんが、戦闘用パワードスーツの試作品が存在する様です」
「そうか、政治体系はどの様な物だ？」
「帝国の名の通り帝政を用いています。宗教については多神教を信仰しており、異教徒を貶める様な教義は確認できませんでした。文化風習で目に付いたのは『鏡であれ』と言う教えが根付いている事です、これは初代皇帝が残した言葉だそうで、善意には善意を敵意には敵意を返すと言う教えです」
「こちらから敵対しなければ問題は少ないようだな」
「ですが一つ気になった事があります、彼らの技術力は十四年前まで我々と同等だったようなのですが、その短期間で急激に進歩しているのです。更にその技術を作ったのは全て同じ人物の様で」
「篠ノ之束に匹敵する人物がいると言う事か」
「その可能性があります」
　またアストリア帝国王宮の皇帝執務室でも皇帝と宰相、役職付きの貴族が集まり会議が行われていた。
「やはりＥＵ諸国、日本、中国、ロシアの圧力外交は限度を超えています。何らかの報復を行うべきかと」
「しかし大義名分を得なければアメリカからの反発も起きるぞ、その点はどうするのだ？」
「それについては条約を結ぶ名目で外交団を派遣します。これは過激な女尊男碑主義を持つイギリスが良いでしょう、派遣する人員を全て男性にすれば無下に扱うでしょうからそこを抗議すれば良いのです」
「謝罪する頭があれば無下に扱う事わせず、謝罪が無ければ報復する訳か」
「丁度良く通商条約を結ぶ会議があります、そこで実行しましょう」

第四話

イギリスとアストリアの通商交渉は苛烈を極めていた。理由はイギリスがアストリアに無理難題を吹っ掛けたからである。

「ですから、その条件は飲めないと何度言えば分かるのですか！」

「何よ、ただ石油を安く輸入させてほしいと言ってるだけじゃない」

「その価格が問題なんですよ！　１０バレル７ポンドは安すぎだ！この条件で輸出は出来ない！」

「そちらが安くすると言ってきたのでしょう？　文句があるのなら交渉決裂で構わないわよ」

「そちらの出すカードも無いままこれほど吹っ掛けるなど、常識は無いのか！」

「そう。で、この条件を飲むの？　飲まないの？」

「飲めるわけがない！　ではこれで我々は帰らさせていただく」

「ふん、やっぱり男は馬鹿ね。あれほど譲歩してあげたのに蹴るなんて」

「そうですね、後悔しなければ良いですけどね～」

「手筈はどう？」

「空港への途中で取り押さえる事になっています、その後は……」

「これであの国も大人しくなるでしょう、女に逆らうからこうなるのよ」

「全く、何なんだアイツは。外交の何も知らないで交渉の場に出て来て」

「まもなく空港です、国に帰ったら一杯やりましょうよ」

「そうだな、早く帰って飲み会でもやるかっ!!」

「どうした運転手!!」

「それが、何者かに前方を塞がれました！　後ろもです！」

「何者だ！　我々はアストリア帝国の外交官だぞ！」
「知ってるよ、こうしねえと俺達がヤバいんだ。恨むなとは言わねえが大人しくしてくれや」
「くっ」

翌日、昨日帰国するはずだったアストリア帝国の外交官の死体が発見された。この事態にアストリアはイギリス政府に謝罪と犯人の引き渡しを要求するも断られる。この報復としてアストリアはイギリスへ宣戦布告する。

イギリスはこれに対しＮＡＴＯ各国へ参戦を要求。多くの加盟国はそれに応じるもアメリカは大義はアストリアにあるとしてこれを拒否、またＮＡＴＯからの脱退も宣言する。
「ふん、ＩＳを持たない国が勝てる訳無いでしょう。さっさと捻り潰してバカンスがしたいわ」
『司令部よりＩＳ部隊へ、アストリア帝国艦隊が接近している。迎撃を行え、既にセンサーに捉えられる筈だ』
『何言ってるの？　センサーに反応は無いわ。間違いじゃないの？』
『展開地点より北西に５００㎞だ、センサーの感度を落としすぎだぞ』
『感度は最大よ「０―０―０よりミサイル！　数７２！　距離５００！」
「何で反応が無かったのよ！　各機迎撃！」
「駄目です！　ミサイルが避けます！」

『こちらアップルガス。やはりＩＳはセンサーに大部分を依存している、欺瞞反応を流せばかく乱は十分に可能だ』
『そうか、成果は十分だ。帰還せよ』
『了解』

「全ミサイル…消滅しました」
「どういう事？　まだ迎撃していないミサイルまで消えるなんて」
『……ＩＳ部隊！　反応しろ！』
『何よ、何があったの？』
『ロンドン、ベルリン、パリが攻撃されている！　さっさと帰還しろ！』
『はあ!?　センサーに通過した反応は無かったわよ！』
『衛星には北北東５５０kmにアストリアの艦隊が展開している！　迎撃に迎え！』
『分かったわよ』
「何なのよ、各機へ北北東へ向かうわ」

『征伐艦隊へ、こちらアップルガス。ＩＳ２４機がそちらへ向かっている』
『こちら征伐艦隊、了解した』
「全機聞こえたな、ＩＳにバルキリーの力を見せつけるぞ」
　スペイン北西沖でＩＳと可変戦闘機（ＶＦ）の空戦が始まった。空戦開始初期はＩＳ優勢だったもののＶＦが一撃離脱主体に切り替えるとすぐにＩＳと互角になり、母艦からの増援が到着するとＶＦ優勢になって行く。
「何なのよ！　一発来たと思ったらすぐに逃げて！」
「追いかけようとしたら別のが来るし！　うっとおしいのよ！」
　一撃を仕掛けるとすぐに反転するＶＦ、回避して追撃しようとすると別の機に攻撃を仕掛けられるＩＳ。優位に立っているのはどう見てもＶＦであり、ＩＳはそれに振り回されるだけであった。途中母艦で補給するＶＦと常に緊張を強いられるＩＳ、どちらが集中力を使うかは一目瞭然であり、遂に一機が撃墜される。
「きゃあ！」
「なっ、ＩＳが……撃墜された？」
「下は海よ、このままじゃ溺れちゃう！」

「私は泳げないの！　撤退するわ！」
「ちょっ、何勝手な事を言ってるのよ！」
ＩＳが絶対だと信じていた操縦者たちは恐慌状態に陥り、我先にと逃げ始める。ＶＦもただ逃がす訳もなく、追撃により徐々に数を減らして行き退却に成功したのはたったの５機であった。

第五話

ＩＳが敗北し、ＩＳ開発の為に通常兵器を削減していた各国に勝ち目などある筈も無くアメリカの仲介で講和交渉を行った。２０３０年３月２１日、圧倒的不利であった各国はアストリア帝国の要求を全て飲んだ無条件降伏をするに至る。講和条約の内容は以下の通りであった。

・賠償金総額は２兆アメリカドル。支払いの内訳はイギリス４０％、フランス２０％、ドイツ１０％、オランダ５％、イタリア５％、ギリシャ５％、スペイン７．５％、ポルトガル７．５％とする。

・賠償金の支払い間隔及び一回当たりの支払額は各国政府に一任する。ただし賠償金は１５年間は無利子、それ以降は年利５％（複利計算）とする。

・アストリア帝国が鹵獲したＩＳコア、合計３２個はアストリア帝国の物とする。

・賠償金の支払いは物納で行う事も可能。ただしその場合は国際相場の５％分を支払ったとして扱う（１００万ドル分を物納した場合５万ドル分の支払いとなる）。

・アストリア帝国は占領地を全て返還する。ただし返還した領土にどんな不具合があっても抗議を受け付けない。

この戦争によってやはり戦争は数が重要になる事が示され、各国は通常兵器の再建に力を注ぐ事となる。しかしＩＳ保有国のうち通常兵器を維持していたのはＩＳに重点を置いていなかったアメリカ、そして国土が広くＩＳだけでは全てをカバーできないと判断したロシア、中国だけであった。その他の国、特に日本は通常兵器の殆どを廃止してＩＳに国防の殆どを任せており、ヨーロッパ主要国と共に世界への影響力は著しく減衰した。

「まさかアストリアが勝つなんて、思ってもいませんでした」

「山田先生、何もおかしな事では無い。ＩＳは正面対決では最強でも

戦争で意味を成さなかっただけだ」
「でも織斑先生、こうなるとあの篠ノ之博士が何をするか想像が付きませんよ」
「確かに、束の行動は意味が解らんからな。それよりあの件はどうなっている」
「世界初の男性ＩＳ操縦者の事ですね、名前は織斑秋十、年齢１５歳、中学三年生です。現在はホテルに保護しています」
「全く、アイツは何をしているんだ」
「お知り合いですか？　そう言えば苗字が同じ……もしかして弟さんとか」
「そうだ、これからの扱いだが」
「とりあえずＩＳ学園に入学させて問題を先送りにするようです、その間に本人に何処に所属させるか選択させると。そして、その……そして篠ノ之博士の妹さんも入学させるそうです」
「まあ、何かあればシスコンの束が黙っている訳がないからな。妥当な判断だろう」

「いや～何なのあの国、８ヶ国と戦争して圧勝って。それにやっぱり戦争でＩＳは役に立たないよね」
「しかし良かったのですか？　束様のＩＳがあの様に」
「そもそも私はＩＳを兵器として作った訳じゃ無いしね、旅客機が戦闘機に撃墜されても当然でしょ？　それと同じ事だよ。よしこの国に行ってみよう！」
「危険では無いのですか？」
「領海外から浮上して向かえば問題無いでしょ、シールドを張っとけば潜航する時間は稼げると思うし」

＜ニュースです。戦争中であったアストリア帝国とイギリス等８ヶ

国が停戦しました。公表された和平条約の内容はアストリア帝国に大きく有利な内容となっており、戦況もアストリア帝国が圧倒的有利だった模様です。軍事評論家の佐々木さんをお招きしていますのでお聞きしましょう＞
＜まず今回の戦争でＩＳは役に立たない事がはっきりと分かりました、アストリアはＩＳを持っていませんからね。それにアメリカのミリタリーマニアが公表した情報によると兵器の性能はこの世界と同じくらいの様ですし、数の差に押し潰されただけですよ＞
＜そんな訳ないわ！　どうせ卑怯な手を使ったに決まってるわよ！＞
＜戦争に卑怯も糞も無いと思いますがね、まあそれはともかくアストリアにはＩＳで対抗出来ない事が明らかになりました。これについてですが対応は二つ、アストリアに友好を求めるか対抗出来る力をつけるかです。まあ日本がとれる選択肢は一つしかないですけどね＞
＜それは何故でしょうか＞
＜そんなのこの国が通常兵器の殆どを廃止したからに決まってますよ、噂ではそれまで作っていた企業は全てアメリカ企業が事業を買収したそうですからまた装備を整えるには他国から買うしか無いですね＞

「コアの解析はどの程度進んでいるかね？」
「所長、ＰＩＣと呼ばれる反重力機構の原理は解明しましたがそれ以外は依然不明ですね。まあＰＩＣを最優先で解析していたのでそうなるでしょうが」
「そうか、それで製造は可能か？」
「デッドコピー以下の物ならば試作品が出来ています。ただ性能が最大で１kg以下ですので実用には使えませんね」
「なるほど、まあこのプロジェクトに時間がかかる事は分り切った事だから良い。それよりも軍から開発中止になった輸送飛行船に使え

ないか聞かれたんだが」
「あの欠陥品にですか？　あれが中止になった理由は積載重量不足ですから性能が向上すれば問題無く使用出来ます。エネルギーも反応式タービンエンジンを使えば賄えると思いますし。今イチカが試作品の調整をしています、見に行きますか？」
「そうさせて貰おう